

6 香りとまちづくり



田村 友朗
TAMURA Tomoaki

香り彩るまちづくり推進機構/会長

明治初期からハッカ栽培が盛んだった北見市では、紆余曲折を経て、ハッカ文化継承のために様々な取り組みを行ってきた。これまでの歴史を大切にしながら、行政、商工会議所、商店街、市民など様々な関係者を巻き込み、ハッカの町として有名になった北見市の香りを活用したまちづくりを紹介する。

北見のハッカ栽培

単一の農産物で世界生産量の70%のシェアを誇る作物が、日本にあったことをご存知ですか。

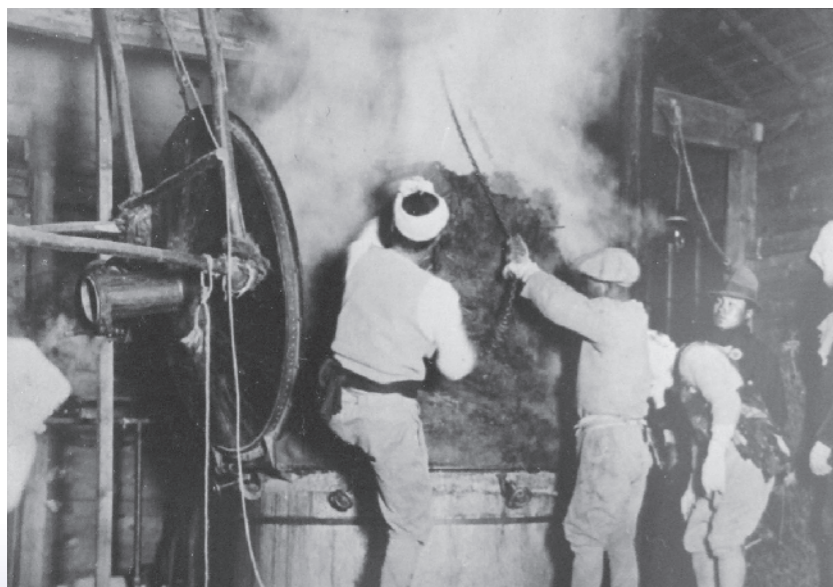
昭和14年、北海道北見市にあるホクレン農業協同組合連合会のハッカ精製工場が、ハッカ取卸油の生産量で世界の70%を占めました。かつてフランスのグラスにある世界香水博物館の世界地図には、北海道の位置にpeppermintというピンが立っていました。

北見市は北海道の東に位置する人口11万2千人のオホーツク圏における中核都市です。ハッカ生産

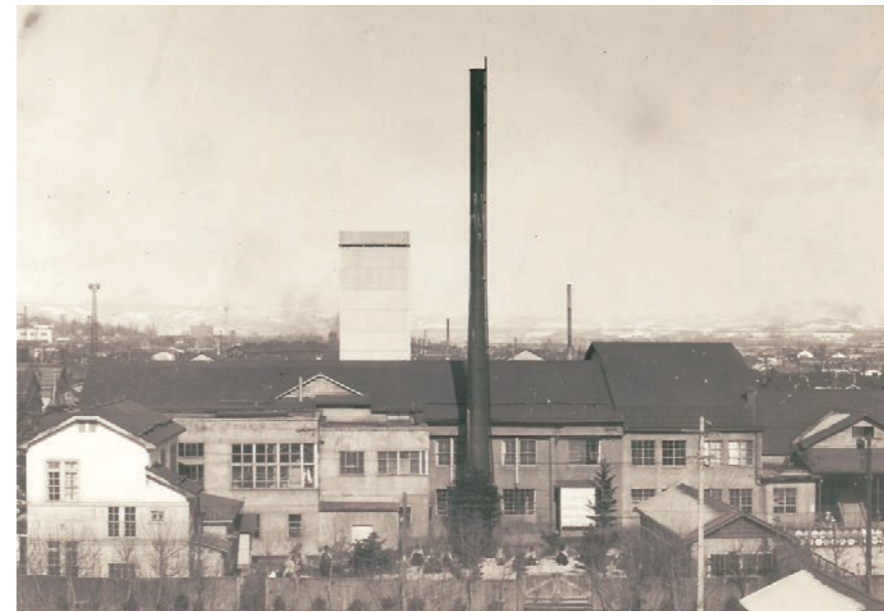
の歴史は明治時代までさかのぼります。湧別村で植え付けされたのが始まりで、その後オホーツク全域に広まりました。野付牛にも湧別から苗を持ち込み栽培されました。野付牛とは昔の北見市の呼び名で、アイヌ語の「ヌブ・ウン・ケシ＝野の端」が訛ってノツケウシとなり、明治8年に漢字表記で野付牛となりました。

当時は、他の作物よりも同じ生産面積から得られる収入が10倍にも達したこともありました。そして、蒸留作業を経て加工されたハッカ油は非常にコンパクトであり、運搬事情を考えるとこの地区での栽培にはうってつけな作物でした。漢字で書く「薄荷」はここから来ているとの説もあります。

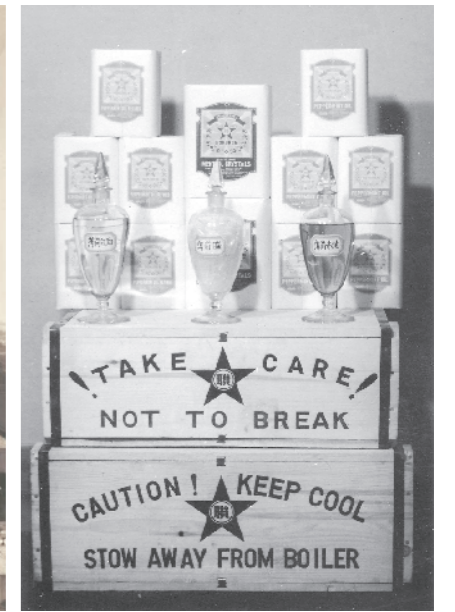
明治30年、野付牛に北海道の警備と開拓にあたった兵士とその部隊となる、屯田兵と北光社移民団が入植しました。屯田兵は北海道開拓において重要な存在ですが、厳しい自然環境の中での開拓の苦労は想像に難くありません。明治37年からの日露戦争に屯田兵が出征している間は、家族がハッカ栽培で支えたそうです。日露戦争後は北見周辺でハッカが栽培され、多大な経済的恩恵をもたらしました。



農家でのハッカの蒸留



薄荷工場全景



工場のハッカ製品

ハッカ栽培の栄枯盛衰

大正時代に入ると大冷害の影響でハッカ価格が高騰し、栽培の中心は本州から北海道に完全に移行しました。その後、第一次世界大戦時には食糧増産のために相当数の農家が畑作に転換し、ハッカ栽培にとっては厳しい時期となりました。

昭和時代になるとハッカは再び値を上げ、栽培が盛んになります。昭和8年にはホクレンのハッカ精製工場が建設され、多くの農家がハッカ栽培に注力しました。翌年から北見産ハッカの輸出が開始され、昭和14年には世界の生産量の70%を占め、ハッカ王国として北見ハッカの名を世界にとどろかせました。

ところが昭和15年には国家統制により食糧増産に注力しなければならなくなり、翌年には太平洋戦争が勃発し、終戦までハッカ栽培は中断となりました。戦後は品種改良も進み、天皇陛下がハッカ工場を訪問されるなど賑わいを取り戻しました。

しかし、この頃ブラジル産ハッカが台頭し始め、中国産も進出してきました。また、品質の良い合成ハッカもでき、北見産ハッカは輸入ハッカと合成ハッカにシェアを奪われることとなり、加えてハッカの輸入が自由化され、関税の引き下げによって北見ハッカ工場は閉鎖に追い込まれました。その結果、ハッカを生産する農家はなくなり、道端でハッカの香りを嗅ぐ機会もなくなりました。

ハッカ文化の継承

その後、民間企業がハッカ製品の販売を開始し、ハッカ文化の継承が叫ばれるようになりました。昭和61年、ホクレンの北見ハッカ工場は保存運動の後、ハッカ記念館として現在の位置に移設保存され観光スポットとなっています。

そんな中、翌年2月には、ハッカのまち北見を印象づけたいと「まちづくり研究会」が発足しました。発足時は農業、自営業、公務員など様々な職業のメンバー15名が集まり、6月20日を「ハッカの日」と定め、各種行事を通じて市内外にハッカのまち北見をPRしていこうと盛り上がりました。

イメージキャラクターを公募し、ハッカの葉をくわえたエゾリスが採用され「ミント君」と命名されてハッカの日にお披露目となりました。このイラストは北見市のPRに賛同する企業ならば無償で使用できるとしたことで、多くの企業が採用しました。ご当地キャラクターのはしりだったのではないのでしょうか。着ぐるみも作成され、様々なイベントに招かれ、後に結婚相手となるペッパーちゃん、そしてその子供たちのペミンちゃんやグリーンちゃんも誕生し、市民の人気者となりました。

また、ミスペパーミントを選出してアンバサダー役を務めてもらうことで、益々ハッカのまち北見のイメージを広げていきました。平成2年には第4回「ふるさとづくり大賞」(現総務省が主催)を受賞し

たことで、活動に一層拍車がかかり行政、商工会議所、商店街を巻き込み大きなうねりとなりました。

ハーブを中心としたまちづくり

まちづくり研究会は、その後「香りの文化村構想」を提言しました。ハッカの特徴は何といても香りです。そしてハッカは最も身近なハーブです。そこで「ハーブとともに生活するまち北見」と考え、栽培から活用までを普及啓発しながら地域文化にしていこうと活動を進めることとしました。

より多くの市民に参加していただき、ハーブとともに生活できるまちづくりを目指して、行政や企業との連携も模索していくようになったのは自然な成り行きでした。この活動は、まちづくり研究会から発展的に「香り彩るまちづくり推進機構」へと受け継がれました。活動の拠点を求め、河川敷を借りた「香りゃんせ公園」開園に向け動き出しました。公園の特徴は何といても市民参加の公園ということです。

総面積10.4ha（野球のグラウンドに

換算すると4つ分）の敷地を3つのエリアに分けました。一つ目は個人、家族やグループが管理するコミュニティガーデンエリアです。二つ目は学校、サークル、企業グループが参加するノットガーデンエリアです。そして三つ目は北見市や香り彩るまちづくり推進機構が管理するフラワーガーデンエリアです。



コミュニティガーデン



香りゃんせ公園全景

構想から議論を重ね、北海道開発局やはまなす財団の理解を得て、平成7年に第一次造成工事が始まり、名称も「香りゃんせ公園」に決定。その間、香り彩るまちづくり推進機構は、ハーブに造詣の深い当推進機構の会員をリーダーに、無農薬かつ北の大地でも越冬できる品種の実験栽培を2年間継続して実施しました。

公園内で植栽されているハーブは、確認されているだけでも和種ハッカ、洋種ハッカ（パイナップルミント、アップルミント、ペパーミント）、ジャーマンカモミール、ダイヤーズカモミール、オレガノ、ヒソップ、ラムズイヤー、ソープワート、タンジー、ヤロー、キャットニップ、ベルガモット、ムスクマロウ、チャイブ、ワイルドストロベリー、タイム（レモンタイム、コモンタイム、シルバータイム）、セージ、レモンバーム、サントリーナ、ラベンダー、ナスタチウム、サラダバーネット、タラゴン、チャービル、スイートバジル、ルバーブ、ローマンカモミール、ポジリ、イタリアンパセリ、ロケット、コモンマロウ、ニゲラと36種の様々な香りを体験することが可能になりました。

香りゃんせ公園は小学生の課外授業、幼稚園保育所の遠足、お年寄りの散歩などで利用され、後に完成した親水公園では6～8月の短く暑い夏の間、子供たちの歓声が聞こえるほど賑わっています。他にも数々のイベントで利用され、北見ハーフマラソン大会のスタート及びゴール地点、日本初のソーラーカーの公道レースのスタート地点ともなりました。平成18年、ハーブでまち興しをしている市町村が年に一度集うハーブサミット第15回大会もここを会場に行われました。

毎年7月に行われる「香りゃんせフェスティバル」には、ハーブ愛好家が集ってお互いの活動をたたえあうと共に、コミュニティガーデンの表彰も行われます。フェスティバルのメインイベントはハーブを使って行うハーブウェディングです。20年以上にわたって執り行われ、たくさんのカップルがハーブ



第17回香りゃんせフェスティバル

の香りと花々に囲まれたバーจินロードを歩んでいます。

香りまちづくり活動

過去の歴史を大切にしながら現在の生活に活用し、そして街の未来に向けて「香り文化」を継承していくこの活動は、世代を超えて受け継がれています。行政、市民、団体、企業がそれぞれの役割を持ち、また協力しながら北見市での生活を豊かにする活動を行っています。

平成13年には、国土交通省第11回「全国花のまちづくりコンクール」国土交通大臣賞、環境省第1回「かおり風景100選」に北見のハッカとハーブが選ばれ、国土交通省第13回「手づくり郷土賞」地域活動部門でも受賞と、トリプル受賞ができたのも多くの方々関わったことが大きいと感じています。

企業の方も行政の方もそれぞれ市民として、今後も香りにこだわったまちづくりと文化の創造をしていくことを願っています。

<執筆協力>

- 1) 株式会社 北見ハッカ通商
- 2) 一般社団法人 北見市観光協会
- 3) 北見ハッカ記念館
- 4) 北見市

<写真提供>

- P28下、P29左上、右上写真：北網園北見文化センター
P30中、P30下、P31上写真：香り彩るまちづくり推進機構